

中国歴史班

雲南南部地域の環境変遷と地域社会

野本 敬（学習院大学人文科学研究科史学専攻博士後期課程）

キーワード：地域社会、人口変動、石碑

A Note on Local Society and Environmental transition of South Yunnan

NOMOTO Takashi (Gakushuin University Graduate School of Humanities Doctoral Course in History)

Keywords : Local Society, Population Movement, Stone Inscriptions

要旨

本稿では雲南南部地域の環境変遷について、地域社会に起こった変化を石碑の建立と内容から検討する。清朝の統治下で一時相対的に安定した雲南南部の地域社会は、19世紀以降全中国的な人口圧力の結果、大量の移動人口を誘引し、それは地域社会の従来秩序の崩壊と新たな再編を必要とした。環境保護に関する取り決めもその例外ではなく、石碑に書かれた記述からは新来住民も合わせて新たな秩序確立をめざすものが見られる。こうした環境の持続的利用と地域秩序再編の試みは20世紀まで継続され、巨視的な環境変遷史を考える上で多くの示唆を与えるものであろう。

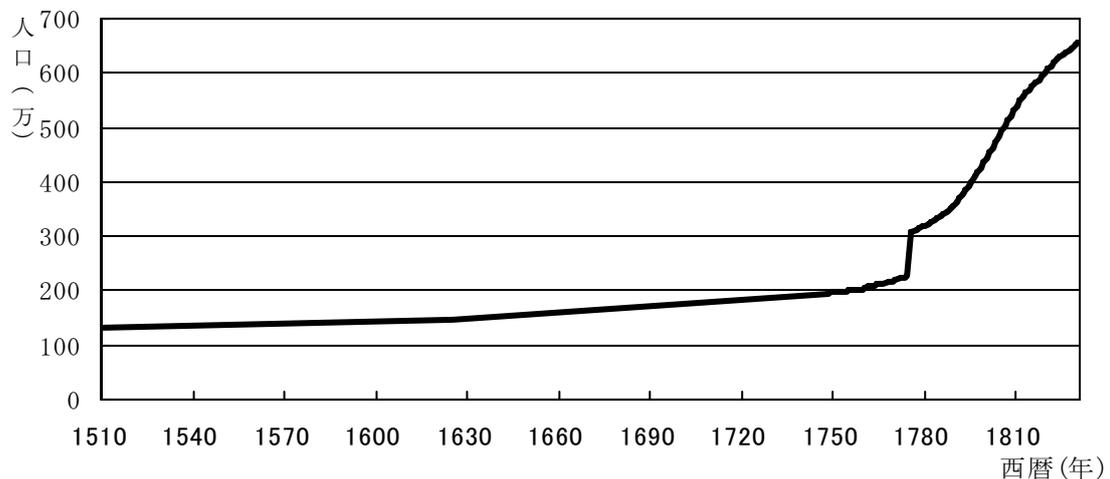
はじめに

本班では生態史を考える材料としてはこれまで注目されてこなかった碑文資料の収集・利用による再構成を目指して活動してきた。本稿ではその生態史研究において碑文資料の物語る歴史性を検討したい。

1. 地域社会の変動と人口

これまでもしばしばふれられてきたことだが雲南省全体の人口の動向は2つの画期を有し、1つは14世紀以

図 雲南全省人口変動



降の明朝による政治的入植、もう一つは 18 世紀以降中国全土で起こった爆発的人口増加及びその結果としての経済移民の流入といえる。数量的にみれば、16 ~ 17 世紀を通じて微増傾向であった人口が、18 世紀半ばから急カーブを描いて上昇し、その結果雲南の地域社会に与えた影響は非常に大きいことが窺い知れよう。

こうした傾向は中国全土に共通するものであり、清朝中期には中国全土で山間地への流民の移動が盛んとなった。例えば中国南部の広範な地域では山に簡素な小屋がけをすることで「棚民」と呼ばれた人々が森林伐採とともに当時山間地での移住を可能とした新大陸産作物 - トウモロコシなど - を植え、あるいは商品作物の栽培を通して「山区経済」の展開を図ったりした。しかしこうした移住民の到来やその後の生産活動はしばしば先住の地域社会の秩序に抵触するものであり、また移住先の環境にも多大な影響を与えしばしば紛争の火種となった。[渋谷 2000]

こうした移動人口の山地への移動は 18 世紀半ばにはじまり、結果生態系の激変を招くことになった。秦嶺山脈の事例では土地の経営権を借り、木材を伐採して売却すると続いてトウモロコシの傾斜地での栽培に移り、更に軽工業や商品作物の栽培などいわば掠奪的ともいうべき環境負荷の高い生産活動を展開したのである。[上田 1994]

2. 地域秩序再編の試みとしての石碑

ではここで環境やそれに関連する地域社会の取り決めについての碑文について検討しよう。

まず以下にこれまで採取した環境及び環境に関連する内容を含む地域社会の規約についての碑文のリストを示す。現段階ではまだ分析の途上であるため、点数はこれまで採取したうちのごく一部に過ぎないが、その傾向の一端を推測することは可能であろう。

表 環境及び関連規約碑文

No.	名称	採録地	立碑年代	内容
1	封山護林碑	普洱県	乾隆60 (1795)	水源林保護規定
2	菓禁碑(残欠碑)	普洱県	光緒20(1894)	漁労の際の毒使用禁止
3	斫樹禁約(仮)	普洱県	嘉慶13(1808)	水源林保護規定
4	封禁碑	石屏県	道光29(1821)	山林保護規定
5	封山禁樹碑	石屏県	嘉慶22(1817)	山林保護規定
6	署臨安府石屏州…(仮)	石屏県	嘉慶4(1799)	水源林保護規定
7	關聖宮碑	元陽県	道光13 (1833)	土地境界設定と山林保護
8	盖聞朝廷有律法(仮)	元陽県	咸豐1(1851)	森林保護
9	紅土塞水井碑	元陽県	乾隆51(1786)	共同水利事業
10	臨安府告示碑	元陽県	嘉慶12(1807)	水源管理規定
11	龍頭全寨公議碑文	蒙自県	道光17(1837)	肥料利用規定
12	護林告示碑	広南県	道光18(1838)	山林保護
13	告白碑	広南県	道光4 (1824)	山林保護
14	五普六寨産業訟争碑	麻栗坡県	民国22(1933)	土地紛争
15	創建水閘校舎食廩造林碑	馬関県	1946	治水管理
16	值生水閘記碑	馬関県	1946	治水管理
17	棺材山護林告示碑	硯山県	嘉慶17(1812)	森林保護
18	護壩護林告示碑	硯山県	光緒7 (1881)	樹木保護

※石碑調査リストより抜粋。

ここで一見して明らかな点はその立碑年代が 18 世紀後半以降の時代に集中し、特に 19 世紀前半より各地で軒並みこうした碑文の成立が増加するという点である。更に現在までの内容の分析によれば、例えば No.5 の碑文については明朝萬曆年間(16 世紀末 ~ 17 世紀初頭)にその起源が記され、その後 18 世紀後半に一度取り決められた内容を更に 19 世紀初頭に再度取り決める必要が生じて立てられたものであり、これは他の碑文の成立時期もほぼ重なる一定の背景が生じた傍証とはいえないだろうか。例えば No.6 や No.8 では森林の乱伐を行って従来の地域秩序に縛られない移住民の存在が記載され、No.11 では地域資源の乱獲 / 転売といったかたちで商

品経済の浸透が伺えるのであり、更に No.14 にある「元来非漢族の地に入植した漢族が 18 世紀前半に土地の侵奪を行い、その結果生じた土地紛争は結局 20 世紀まで係争が続いた」という記述などは、この時期各地で地域の規約を再度確定する必要に迫られた社会変動を物語るものと言えるであろう。無論現存する石碑の時代的制約という点も考慮すべきではあるが、その内容に着目した場合こうした傾向は一定の社会的背景を反映しているとみなすことができると考える。

またこうした人間活動は環境にも大きな影響を与えた。18 世紀後半以降、上掲表に見られる碑文リストが物語るように、実際に荒廃した環境に起因する災害が、当時の人間にとってもはっきりと認識できるようになったのがこの時代だったのである。一例を挙げれば当時雲南の地方官であった黄夢菊は『滇南事實』という本の中で、雲南東北部のそれではあるものの森林破壊・はげ山化とそれに伴う水土流出と災害とを明確に関連した事柄として理解しており、災害予防のための大計としての植林事業を推進した。

また同時に移住民の流入による社会的な変化は、地域社会のレベルでも新たに新来者も含めたかたちで地域社会の秩序＝規約を再編成することを必要としたのである。こうしたせめぎあいは 20 世紀まで継続され、ある意味環境の持続的利用と地域秩序再編は今日まで継続する問題となっている。

おわりに

以上のとおり初歩的検討ではあったが、石碑の年代と内容は雲南南部地域社会及び環境の長期変動とその具体的様相を解明する有力な手がかりであることが理解できよう。中国では人間活動の環境負荷が高く、自然環境は人間社会の活動に大きく影響される、いわば人間活動との間のせめぎあいであり、環境変遷史を考える際は人間活動、地域社会の長期変動を考慮することが不可欠なのである。

【参考文献】

渋谷裕子 2000 「清代徽州休寧県における棚民像」, 山本英史編『伝統中国の地域像』慶応大学出版会所収 :211-250
上田信 1994 「中国における生態システムと山区経済 - 秦嶺山脈の事例から」, 『アジアから考える [6] 長期社会変動』, 東京大学出版会 :99-129

Synopsis: This paper examines the change in Local society and the environmental transition of southern Yunnan on the bases of stone inscription. Although the local society of southern Yunnan was relatively stable under the rule of the Qing dynasty, after the 19th century, due to explosive expansion of population in whole China, the conventional order started to collapse, and these changed conditions demanded reorganization of local communities. The social agreements concerning environmentalism are no exception, and the stone inscriptions shows that attempts to restore order were made with the arrived of new residents.

Attempt to the continually utilize the environment and restore the local order continued into the 20th century, and provides us with material to studying history of environmental transition from the broad perspective.